

わたしの研究 米国臨床留学の立場から コホート研究のデータ解析

庄司 絵理

テキサス工科大学医療科学系センターラボック校精神科/順天堂大学精神医学教室

テキサス工科大学医療科学系センター 精神科臨床研修医2年目の庄司絵理と申します。卒業後4年目、令和の幕開けとともに医局を飛び出し、こちらのポストに着任して一年と半年が過ぎたところです。しかし留学したは良いものの、慣れない医療システムや診たことのない症例、不味い食事、更にはコロナの大流行で身動きが取れず、留学中に特段珍しくないことかとも思いますが、ホームシックで憂うつな気持ちで過ごしておりました。

「留学、つらい、精神科」等の検索で、本誌 Vol 30. 2, 2019 年の「わたしの研究」にたどり着き、そこで平野昭吾先生が「留学は辛かった」と書かれていらっしゃいました。世界的な研究をされている先生でも辛いのか…と、妙に救われると同時に、何かヒントを得た気がして、ダメ元で本誌に連絡を取り「私にも投稿させてください!」と、無茶な飛び込み営業をさせていただきました。快諾してくださった編集委員の先生方の懐の深さには、頭が下がるばかりです。本当にありがとうございます。

さて、当方は米国に臨床留学しております。こちらでは医学部卒業後、Residency という4年間の臨床研修を通じて精神科の基本を学びます。希望者は Fellowship に進み、さらなる専門を極めます (child-adolescent/addiction/forensic psychiatry など)。当初は臨床で渡米したので、研究はまあいいかな…と思っていたのですが、現実はその甘くはありませんでした。レジデンス中の研究実績は、フェロシップ採用の選考基準になるのです。

困りました。

当方、研究らしい研究はほとんどした事はありません。認知症・変性疾患の精神症状に興味があると research coordinator に伝えると「うちではそんな研究をやっていない」と一蹴されてしまいました。そうこうしているうちに臨床に追われ (一時期 COVID-19 専用の ICU 病棟に配属になり、数年ぶりに人工呼吸器に触れました)、慣れない環境に疲弊し、機能不全には至らないものの、自分が何をやっ

ているのかわからない日々が過ぎていきました。

臨床に追われていた私だったので、研修医一年目も終わりに差し掛かった頃、神経内科のローテーション中に知り合った、タイのマヒドン大学出身の先輩に引っ張ってもらい「COVID-19 大流行中における多発性硬化症 (MS) 病態修飾薬 国内外のガイドラインについて」というレビュー論文を共著することとなりました²⁾。特に自分が MS に詳しくなかったわけではなく、単純に日本語のガイドラインを読めるレジデントが他にいなかったからなのですが、臨床で必死でもチャンスはあるんだ、レアキャラにはレアキャラなりの需要があるんだなあと感じ、とても嬉しかったです。

私の所属する大学病院には、世界中からさまざまな経験をした医師が集まっていることが強みだと思います。各科ローテで一緒に働いた先生と組み、またまたレビューですが、中国出身の MD-PhD の先輩と「集中治療室における Burst-Suppression Pattern (BSP) へのアプローチ」という記事を出版しました¹⁾。Physiology of BSP, BSP induced by anesthetics の項を担当させていただいたのですが、初期研修の貯金で多少なりとも麻酔科の経験があったこと、少々脳波読影のトレーニングがあったことが幸いしました。

その後臨床が一段落し、所属科でも「メタンフェタミン中毒と希死念慮の関係」「遠隔治療 (telemedicine) と多発性硬化症における抑うつ・不安症状の関連」「ラボック市の酒類販売解禁令前後の ICU におけるアルコール離脱けいれん発作の症例数の推移」などチャートレビューを中心とした、小さいですが非常にアメリカらしいプロジェクトに取り組むことになりました。地味ながらも楽しんでおります。

筆者のプロジェクト

中心となって取り組んでいるのはデータ解析で



左から アランディア先生, 筆者, ニューゲバウアー先生

す。当大学には Project FRONTIER (Facing Rural Obstacles to Healthcare Now Through Intervention, Education & Research) という、2006 年から続いている地元西テキサスの縦断研究があります。アルツハイマー病を中心とした認知機能障害のリスクを目的とした研究で、特徴的なのは、ヒスパニック系アメリカ人のデータが多いことです。

現在は喫煙習慣、ニコチン依存度、そして認知機能の関連を調査しております。ニコチン依存度を Fagerstrom Nicotine Dependence Test の点数で分割し、横断的に RBANS (Repeatable Battery for the Assessment of Neuropsychological Status) の点数と比較しています。当初はニコチンではなくマリファナで解析をするつもりだったのですが、データが足りずに断念しました。

ちなみにどうやってこの研究にたどり着いたかと言いますと、たまたまテキサス工科大学の Facebook より老年医学機構なるものが存在することを知り、ふらりと Alzheimer 病のセミナーに参加したところ、老年医学機構の偉い方 (ドイツ人の神経内科の先生) の Dr. Neugebauer から、PhD の先生を紹介していただきました。North Carolina から今年新たに赴任された先生だったのですが、これまたダメ元で「何か研究をさせてください」と CV を添えてお送りしたところ、大変ありがたいことに現

指導者である Dr. Arandia が引き受けてくださいました。

さて、そんなこんな「わたしの研究」です。

レジデントとして仕事に追われる日々ですが、本誌 Vol 31. 3, 篠崎元先生のおっしゃっていた「私の研究のアイデアは、ほとんどがレジデント時代に患者さんとの出会いの中で思いついたことばかり」という言葉に希望を託しつつ、臨床業務に邁進しております。

そして原稿を書いている本日は、米国選挙の開票の日です。結果次第で暴動が起こることも懸念し、大学から外出自粛を依頼するメールが一斉送信されました。ついでに附属病院はコロナの第二波で ICU 占領率 99.9%, 良く知っている ER の先生が COVID で亡くなられたという訃報がたった今届き、時代の先行き不透明さと人生の儚さを感じております。

そして本誌を読まれている、留学を検討されている方へ。長期留学は辛いことが沢山あります。ですが、家族のありがたさ、友人の大切さ、そして日本の長所・短所を振り返る非常に良い機会にもなると思います。

何より留学は、私の夢でありました。その夢の向こう側にいる今、レジデンシーを生き抜くこと、そう遠くない未来に原著研究論文を投稿することを次なる目標としています。

4 年後は一体どうなっているのか…。本当に、渡米して未だ何も成し遂げていない研修医の身ですが、未来を信じて、2016 年 Hillary Clinton 氏の敗北宣言、そして 2020 年 Biden 氏のスローガンから引用します。

“Our best days still lie ahead!”

開示すべき利益相反は存在しない。

文 献

- 1) Pan J, Karukote A and Shoji E (2020) Clinical approach to burst-suppression pattern in an intensive care unit : basic and updates. The Southwest Respiratory and Critical Care Chronicles, 8 (36) : 61-65
- 2) Thakolwiboon S, Zhao-Fleming H, Shoji E, et al (2020) Disease-modifying therapies during the COVID-19 outbreak : A narrative review of international and national recommendations. Int J MS Care, 22 (4) : 151-157.